

後の日の童子

室生犀星

青空文庫

夕方になると、一人の童子どうじが門の前の、表札の剥げ落ちた文字を読み上げていた。植込みを隔てて、そのくろくろした小さい影のある姿が、まだ光を出さぬ電燈の下に、裾すそすぼがりの悄しょうぜん然とした陰影を曳いていた。

童子は、いつも紅い塗ぬりのある笛を手に携たずさえていた。しかしそれを曾かつて吹いたことすらなかった。

植込みのつたの絡んだ古い格子戸の前へ出て、この家のあるじである笏しやくごころう梧朗は、そういう童子のたずねてくる夕刻時を待ち慕

うていた。青鷺の立ち迷う沼沢の多かつたむかしにくらべ、この城外には、いらか藁を立てた建物が混み合っていた。

「きようは大層たいそうおそかったではないか、どうしてからだを震ふるわせているのか、犬にでも会ったのか。」

「いいえ、お父さん。」

童子は、頭をふつて見せた。柔らかい唐黍とうきびのような紅毛が、微風に立ちそよいだ。

「いつもお父さんのおうちのそばへ来ると、妙にからだがふるえるのです。べつに何なんでもない。」

「それならいいけれどね。また加減をわるくするといけないから。」

笏梧朗は父親らしい手つきで、童子の、絹のような頬に掌をあてた。

「お母様は？」

童子は、そういうと家の中をさし覗いた。ココア色をした小鳥が離亭はなれの柱に、その朱塗の籠のなかで往き来し、かげは日影のひいたあたりには既もう無かつた。

「ほら、離亭で朱子しゆすを縫うている。見えるかな、鳥籠のある竹縁のそばにいてるではないか。」

「ええ、呼ぼうか知しら。」

「それよりもそつと行って驚かしてみせたらどうだ。」

童子は、すばやく玄関から次ぎの部屋をぬけ、離亭への踏石へ

おり立とうとしたとき、一軸の仏画が床の間に掛けられてあるの
を見成みまもつた。

「どうしてああいうものを掛けておくの。あの絵は見たことがある……。」

「あれはね。」

笏は、悲しそうに童子と仏軸とを見較べ、躊躇ためらつてやつと重い口をひらいた。

「あれは、おとうさんが妙に寂しくなると掛けてみたくなるものだ。お前があれを見ることが厭なら止めてもよいが……。」

「でも、へんですね。」

古い軸の上に、細い目をしたふっくりした顔があった。蓮華を

台に、古い、さびしい仏は坐っていた。が、その感じは、月夜のように蒼茫そうぼうとした明るみを持っていた。

童子は、庭石の上に降り立った。まわりを青篠あおざさでめぐらした離亭で、朱子を縫う針のきしみが厚い布地であるためか、竹皮を摩するような音を立てていた。童子は、母親の、白い襟えり足あしと瘡なつかせた肩とを目に入れ、そして可懐なつかしそうに心をあせつたためか、竹縁にぎしりと音を囁ませた。

「お母様。」

童子の手は、母親の胸もとへ十字にむすびついた。うしろから突然そうされたので、母親は驚いた目をしばらく静まらせ、間もなく嬉しそうに輝かせた。

「まあ、おまえはどうして来たの。」

母親は、そう言うたときに父親が佇^たっている窓口を見た。ふたりは微笑^{わら}いあつたが、どの微笑いも満足そうな色を漂わしていた。「おとうさんが、門のところへ出ていくくださつてすぐ分つた。」
「でもお母さんはびっくりした。ふいにお前が飛びついてくるから、遠いところをよく来たわね。」

母親は、そういうと一度父親を見た。空を見ていたらしい父親はうつすりと暮^{くれ}縮^{ちぢ}んだ明りのなかで悲しそうに微笑つて見せた。「僕は、一日がけで歩いたつてなかなかお家へまで遠いんですもの。ぐるぐる廻つてばかりいる道なんだから。」

母親は、童子をだき上げ、そうして痛々しそうに眉をしかめた。

「ほんとにどんなに遠いだろうね。」

母親は、庭へ童子を拉つれて出た。童子の好んだ青い扇のような芭蕉は、もう破れた童旗のようにはたはたと夕風に櫛目を立てていた。

「お父さん、この子はどうしてこう顔色が悪いんでしょうね。」

「そう、どうもよくない。」

二人は、こう言い対あうと、童子を真中にして庭後へ出た。

「季氏は？」

「もうかえるところでございましょう。」

母親は、童子に向い、「おまえに季氏という妹ができたんですよ。お前は見たことがないだろうがね。それはかわいい子ですよ。」

。

「童子は、曇った目をしながら、そういう母親の目をみあげた。」

「僕は知らない。」

「いまに会うことができるから。」

童子は、答えようとしなかった。ちょうど自分一人でなかったことに気がつき、それを寂しむような表情が漂うていた。

「季氏にこの子はあわせない方がよいかも知れない、何となくそういう気がする。もし会わせたらそれきりこの子はたずねて来そうもないように思われてならないから。」

父親は、童子のたどたどしている足もとをみながら、暗くなつたあたりに仄ほの浮ういている母親をかえりみた。

「しかし……。」

母親は、言葉を切った。「いつの間にか逢うようになるでしょうし、匿かくしきれるものでありませんから。」と言った。

「それもそうだね。その子の心もちになると寂しいだろうと思うから言うのだが、だが、どうでもよい。」

父親は、蜘蛛の巣に羽ばたく虫を払い、手を石泉つくばいで漕いだ。

「お父さん、もう僕かえろうかしら。」

童子は、立ち止まって言った。

「ほら、もうお食事だろう、あそこに、白い布がかざられたし、みんなが御馳走をこさえている、見えるか。」

「あの円まるいものは何？」

「くだものさ。花もある、もうすこし温良おとなしくしているんだよ。わかったかな。」

「え。」

童子は、しばらくしてから、きゆうに母親をみあげた。

「僕の時計はまだある？」

「ありますとも、鳩のとんで出るのでしょうか、あれならありますとも。」

「あとで見せて？」

「いいとも。」

父と母とはまた顔をあわせた。あたりは全く暗くなった。乳母車の音が微かすかに表からして来た。

「かえつて来たらしいね。」

「車があたらしいからよく軋きしみますこと。」

母親は、門前へ出た。乳母車の上には小さい女の子が、羽根のある帽子のしたで織ほそい目を閉じ、すやすやと睡っていた。

「あんまりよくおよつてらつしやるものですから、そつとして参りました。」

そのため遅くなつたのだと、下婢は、幌をうしろへしずかにはねながら言つた。

「そう、ご苦労でしたね。」

母親は、ぬくまつた小鳥のようなからだを抱きあげると、あか児は目をさまし、あたりを見まわしながら、暗くなつていたので

怖いのか、きゆうに泣き出した。母親は、胸をひろげた。そこから葡萄の実ほどの、珠がすべり出、あか児の唇へふくまれた。

「病院の奥さまにこの花をいただきました。枯れましたけれど。」
「水甕に入れてお置き、いつもよくして下さるのね。」

いつの間にか、童子は母親のそばへ佇んでいた。そうしてあか児を覗き込もうとひくい背を延び上げようとしていた。父親も、うしろに立っていた。

「お母様。」

「なあに。」

「僕にそのあかん坊をちよいと見せて下さい。」

「こうしてですか。」

「え。」

童子は、赤ン坊を覗き込んだ。そばから父親が、童子の肩のところに手をおいて、静かに言った。

「おまえによく肖にていると思わないかい、鼻つきにしろ目にしろ大そうよくおまえに似ている。」

父親は、あか児の頬を指でふれてみたりして、それを童子に眺めさせた。が、むしろ童子の眼の中には明かに不快に近い曇色ある表情があらわれていた。父親にはそれが何よりさきに己が心にかんじられた。

「僕にはすこしも似ていない、僕のような顔はどこにもない、お母様、僕には似てはいはしません。」

母親はその言葉を悲しそうに聞き、父親と顔をみあわせた。父親の顔には、何にも言うなという表情があつた。

童子は、あか児のそばを離れ、もみじしたつたの葉をむしつていた。——食事のときにも、母親は、童子に小さい魚を火にあぶつてつけたが、童子はそれよりも野菜の方に箸をつけた。

「お母様、おさかなはどうして釣るもの。」

童子は、紅い肌をした一疋びきの魚を箸のさきで、指さし尋ねた。

「河にいろし海にもいろの、針のさきに餌をつけ、おさかなの居そうなところへ垂さげておいて、静かにしているのです。お腹のへつたおさかなが来て、フイに食べて針に引ツかかる……。」

「おさかなは痛いでしょうね。」

童子は、母親の顔を見て、痛そうな顔をして「このおさかなもそうして釣れるの。」そう尋ねた。

「多分そうだろうね。」

父親がそばから言った。

「おさかなは人間に食べられることを生きているうちは、あまり考えないらしい、だから悲しくはないのだ。」

「食べられてから悲しくないの。」

童子は、こういうと食卓の向側にいる父と母とを、かわるがわる眺めた。——父親も母親もすこし青ざめ、しばらく黙り込んでいた。

「おまえはむずかしいことを言いますね。そりやお魚だって悲し

いにちがいはなからうがね。しかし死んでいるんだからどうだか分らない。」

「死んでいるんだから分らない？」

童子は、おなじことを言つて、眼で考えるようにして見せた。父親はそのとき不思議なほど何かに思い当つて顔色を変化^かえた。その筈である。母親が真青になつていたから――。

「お父さん、僕はどうしてこうして居るのでしようか。お魚のようにはないでしようか。」

童子は、手に携^もつた笛を腰のあたりに差した。そして童子自身が困りぬいたかおをして見せた。

「おまえはおとうさんの子だから、そうしてお母さんの傍にいる

のは当り前のことなんだよ。おさかなとはちがう。ほらおまえはちやんとそうして其^{そこ}処に坐つてゐるではないかね。」

父親はそういうと、なお一^{いつ}層わかりやすく話し出そうとした。「そうしているとお前にはお父さんの顔がよく見えるように、お父さんからもお前の顔がよく見えるんだ。だからお前は詰らないことを言つてはなりません。」

童子は、黙つて時計をさつきから見^み惚^とれていたが、その白い肌^{たど}に遠い覚えを辿^{たど}るようなむしろ鬱^{うつ}陶^{とう}しい目いろをした。

「あの時計は僕は知つてゐる！」

そう言つて文字を読むような目つきをして立ち上つた。

「そうとも、おまえは何時^{いつ}も珍^{めづ}らしそうに時計を見ていたんです

よ。よく覚えているのね。」

母親は、また言葉を継ぎ足した。「あのときから見ると、おまえは大そう歳をおとりだけれど、あの時分はまだお前は歩くこともできなかつた。」

「そう、僕は歩けはしなかつたのね、けれど今は歩けるのね。ほんとうに何んだかふしぎね。」

童子は、柱の下に立った。そうして刻限ときをきざむ音にちいさい耳そぼだを敬そぼだてた。白い肌をもつ時計には卵黄色に曇った電燈のあかりが、光をやや弱めながら近づいていた。

「そうさ、あのころから見ると、この時計も古いものだ。わずかしばらくだったが、おれには百年も経つたような気がするんだ。」

父親は、時計を見上げながら悲しそうにした。

「でもこの子はこうしているんだから……。」

母親は、童子のあたまを撫でさすった。「ほんとお前を何処どこへ返すものか。」そう言い手をとろうとしたとき、いまのいままでいた童子は、既う玄関のそとに立ち出て、黙ってすたすた歩いて行こうとした。

「もうお帰り？ ひどいわ、そりや。」

母親は、玄関へ飛び出した。そうして父親も。——しかし童子の姿は、植込みのかげにすら影を停めなかった。

「あの子はもう帰って了しまった——。」

母親は門前に立って笏梧朗を顧みた。笏は、瞳を凝らして地面

を見つめていたが、其処に童子のらしい小さい足跡が、やや濡れ湿つて印せられてあつた。

「ご覧、こんなに沢山な虫だ。」

笏はそう言つて、足跡に蝟あつ集まつているうじうじしている馬陸やすでを指さした。——馬陸は、足跡の輪廓の湿りを縫いながら、蠢しゆん乎ことして或る異臭を食はみながら群れていた。母親の心には、優しい子息の足跡を舐める、この肌痒い虫が気味悪かつた。

「にくらしい馬陸。」

母親がその足の下で踏みにじろうとすると、笏はにわかには止めた。古い話によると、亡きものの尋ねてきた足跡を踏むものではない。それはそのままにして置くものだという風に言葉を挿し入

れた。

二人は、黙って対^{むか}い合っていた。——そして馬陸は、靴針のよ
うに童子の足跡を辿って、幾重にも縫糸をかがって倦^あくことを知
らなかつた。

二

笏は、夕刻にはそのふしぎな暗い森の中の家のまわりを、何か
恋慕うもののあるようにうろついていた。森と言つても崖^{えのき}ぎしの
家に過ぎない、ただ非常に古い榎^{えのき}と椎^{しい}とが屋根を覆うていて、お
りおり路上に鷺の白い糞を見るだけであつた。

そこなら七八歳ばかりの子供が、出たり入ったりして、笏は、その子供の顔を見に出掛けるのだった。笏には、その子があまりによく肖ているということばかりではなく、或る日なぞ、笏のところに訪ねてくる子供が、そこらあたりで影をなくしたことに、気を留めていたからであつた。

その夕刻にも、笏は、にわかに関自分の姿を匿そうとして、垣根に身をよせたが、その家の、なりの高いあるじに、すぐ見つけられてしまった。たびたび顔を合すが、お互いに顔をかくしあうようなことが多かつたのである。

「あなたは何かこういつも用がありそうに私の家のまわりを歩かれるが……何か用事でもおありですか。それともただ歩いていら

れるばかりですか。」

笏と同じい年頃のその家の主人は、半好意なかばをさしはさんでなかば央げんな人見知りな表情で、じろじろ笏の顔を凝見みつめた。

「いや、べつにお宅に用事はないのですが、妙な癖でこの道路をただ歩いてみたいだけで、ぶらついているのです。あやしいものではないのです。」

「あやしいなぞとは申しませんが、しかしあまりによくお見かけしますから……ついおたずねしたのです。」

この木彫を仕事にしている人の顔は、ねむげな腫はれぼつたい瞼と、いい、頬皺はれと、どこか酒を飲みすぎた人によくありがちな、くろずんだ皮膚と、一つとして笏の心に変な気が起きずには

いられなかった。就^{なかんずく}中、その沈んだ人を馬鹿にしたような諦め切っているような眼の色には、どうい^{あいて}う対手にも親しそうに話しかける光がなかった。

「お宅はすぐ西洋館からすこし行つたところでしたね。奥さんにはよくお目にかかりますが。」

「え、小路から二軒目なんです。」

笏は、なおぐずぐずしていたのは、玄関の中に、人影らしいものが見えたし、着物のがらの大ききさから言つて、れいの子供らしく見えたから、ひよつとしたら出てくるかも知れないという微妙な期待があつたからだつた。それゆえなるべく話を長びかそうと
していた。

そのうち子供は、珍らしい人と話しているのを、犬などがよくするように、わざと余所目よそめをしながら何かの葉つ葉をちぎりちぎり近づいて来た。——笏は、その顔といい、まるい頭といい、好ましい感じを与える子供の近づくのを待った。

「あなたのお子さんですか、たいへん伶俐りこうそうな。」

「え、気がちいさくて家にばかり居る子なんですが、いや、私のように妙に物に厭うように引つ込んでばかりいるのです。あいさつをしないかな。」

子供は、ちよいと頭をさげた。笏は、永い間その顔をみつめているうち、子供もふしぎそうに眼を凝らしていた。

「おいくつですか。」

「七つです。」

子供は、おとなの話をむしろ陰気臭い目をして、直覺的に自分の身の上に話がはこばれているのに、注意深くなっているらしかった。

「ときどき遊びにいらつしやい。」

さういう筈に、子供は寂しい微笑いがおをもつて答えた。

「では失礼します。」

あるじは、突然さういうと、家の中へはいつてしまった。子供の手をひいて——そして暗い戸を裏から閉めてしまった。変な家もあるものだ。それにしても何という変化かわつた人だろうと、筈は自宅の方へ引きかえそうとした。

と、すぐ垣根にそうした暗みへ犬の足豆が擦れるような音がして、小さい影があるいて行つた。からたちの垣根ばかりだからそのとげにでも手足を引っかけはしないかと思つてゐるうち、小さい影は笏の方へ向いてあるいた。なるべく気づかれないように笏は足音をひくめながら、その子のあとについて、垣根のきわをあるいてゆくうち、いつの間にか自家の前へ出ていた。が、小さい影は、そこにもう無かつた。

「はあて。」

笏は、植込みをぬいながら、そつと、家の中を見た。女は縫物をしてゐる。そしてその傍にいつもの童子が坐つて、糸屑を弄いじくつては丸めていた。よこ顔がそっくりさツキの家の子に似ていた。

が、女はすこしも童子のいることに気がつかないらしく、それを目を遣りもしないで、ときどき溜息については玄関の方をながめていた。あとか恰も何かそこに影のようなものでも折折見出さなければならぬように……しかし童子はおとなしく、ただ小さいあぐら跪座をくんで、ひとりで、それがひとりであるために充分であるように、丸めた彩いろいと糸をいくつも女の膝の上にならべていた。女は、それに少しも気をとられないでいた。静かな電燈の下で、それらの光景が、笏梧朗をして家へはいることを思いとどめさせ、止むなく植込みの中に佇っていた。

童子は、それがいかにも安らかで他念なさそうだった。同じことを繰返しながら倦むこともなかった。母親は、虫のこえにさそ

われたのか、それとも何となく長い疲れが出たのか、針箱に手をささえたまま、うつとりと睡り込んでしまった。——母親とすこし離れて小さい臥床ふしどがあり、そこには赤児がこれも低い笛のような安らかな睡りを睡っていた。いつさいは曇色ある明りの中に、時計ばかり動いている外に物音のない部屋は、きちんと仕組まれたすくりいんのように、おのおの影をひきながら在るままに在った。

笏梧朗は、足音を忍ばせ家のなかへはいると、童子は、すぐに見付けた。そして父親のそばへ恋しげに寄りそうた。

「わたしは先刻お前が垣根のへりを歩いていたのを見た。そして自家の前で見失うたのだ。」

「いえ、お父さん、僕は何にも知らなかったのです。」

「それならそれでよいが……。」

笏は、童子の面を見つめた。「お前はこのさきの、暗い家の子供を知っているかね。まるでお前そっくりで、お父さんにも見境がつかないぐらいなんだよ。お前が来ないときには、お父さんはよくその子供の顔を見にゆくことがあるんだよ。」そう言つて、童子のあたまを撫でた。

童子は、しかしそれには答ええないで、悲しげに父親をさしのぞいた。

「お父さん、どうしてあなたはそのように似ているということばかりを捜してあるくの。僕は誰にも肖てはいない。僕は僕だけし

かない顔と心をもっているだけですよ。」

父親はそのとき初めて気がついたように、そして童子によくわかるように口を切って言った。

「それはお父さんのわるいくせなんだよ。お父さんにはそういう詰らない似ているということさえせめての楽しみなんだ。お前にはそれがよくわかるだろうね。そしてお前がいつでも此^{ここ}処のうちにいられたら、そしたらお父さんはそういう詰らないことなぞ考へはしなんだよ。」

童子は、黙ってうなずいた。そのとき母親がうつすりと目をさました。眩しいものを見つめようとして、それが能く見^よつめられない寝起きの人のように、しばしば洩らせながら童子を見成った。

「まあ、お前そこにいたの。いつから居たの。そしてお父さんも、——わたし睡っていたのね。」

彼女はそういうと、その夢裡になおさまようているような上目をして見せた。

「わたしうとうとしていると、大そう花のたくさん生えたところで、お前にあつただのだけれど、お前はわざとのように知らない振りをして行つてしまったの。なんでも暗いへんな彫り物をしてい
る方がね、ほらいつかあなたにお話をした……。」

彼女は、そういうと急に何かを思いあてたように、笏の記憶をゆすぶつた。

「すぐその、道路のまがり角にいらつしやる彫刻家がね、なん

だか岩の上のようなところに立って、わたしの方を眺めていらつしやる。——すると　この子がわたしの方へは来なくて、その彫刻家のそばへ行くじゃありませんか、しまいにその方がね、この子の手をひいて、水草の生えた花の浮いている水田のようなところへ行っておしまいなすったの。そしていま目をさますとこの子がいるじゃありませんか。」

彼女は、ふしぎそうに笏の顔をみた。笏は、その妻が夢見ている間に、自分が彫刻家の家のまわりにいたこと、その子供をみたことなどを、思い出した。その事を彼女に話をしておいて、「あの彫刻家がね、おくさまによくお目にかかりますとそう言っていた、なんでもないときにね。」

「ええ、わたくし町へ出ようとしてあそこの前をとおりますと、いつでも私の方を眺めなすつて大そうさびしい顔をなすつていらつしやいますの。いつだったか、ふいに何かのはずみにご挨拶をしてしまつて、それからまだ黙礼だけいたしますの。」

笏は、女の顔をみながら己れもやはりそれと同じい、むしろ好意に似たものをおぼろげながら心に感じた。

「あの人は妻をなくしてから、ああしてぼんやりしているらしい、あの子供とふたりきりらしいんだよ。」

「え、そりやわたくしもぞんじていますの。それにあのお子さんときたら、まるでこの子に生きうつしなんですもの。」

女は、いまさらのように童子の顔と、己がこころにある^{おもかげ}佛とを

見くらべるような目色をした。

「全くふしぎなほどよく似ている。」

笏も女と同じことを言った。

そのとき母親は、ふと童子の手に笛の提げられてないのに初めて気づいた。

「おまえは笛をどうかしたの。珍らしくもっていないではないかね。」

「ぼく、笛はつまらないから止した。」

「そうかえ、しかしお前はそんなにまで大人にならなくともいいわ。まだ笛を棄ててもよい年頃ではない……。」

童子は、白いような微笑いをもらしながら、母親にわざとのよ

うに或る哀愁をふくんだ声音こわねで言った。

「笛なんぞ携つていつも鳴らしはしないんですもの。」

「どうして鳴らないんでしょう。」

「笛の孔が塞がってしまったているの、六つの孔がみんな開いていないんです。」

「お見せ。」

母親は、笛を手にとると、古い埃や泥のようなもので凝固かたまってしまった孔内は、吹こうにも息の抜けみちがないために音色が出なかった。

「ひどい埃ね。」母親は、それを縁端へ持つて出て、細い針金のようなもので、孔内を掃除をしようとしながら、

「いまによく鳴るようにしてあげますから待つてお出^{いで}。」

そう言い、孔の一つびとつに針金を貫^さしながら、器用な手つきで古い埃をほじくり出した。丹塗^{にぬ}りの笛の胴にはいつてから密着^{くっくっ}いたのか、滑らかな手擦れでみがかれた光沢があつた。

「お母様、その笛をおそうじしてくだすつても、僕それを吹けそうにもないの。」

「どうしてでしょう。」

「どうしてつて僕そんなものを吹いて居られないんですもの。」

童子は、暗い顔をした。蝙蝠^{こうもり}のよう^{くろ}に黝^{くろ}ずんだ或る影が過ぎ去つた。——笏も、その妻も、きゆうに圧^おし黙つて、哀れな己れの子供とその言葉を裏返しして眺めた。

「そうね。お前はそういう笛なぞ吹いていられなさそうね、母さんが悪かった、母さんは大へんなことを忘れていたから、ついお前を困らせた。」

「いえ。」

童子は、母親をなぐさめようとして、笛の掃除を止めかかったその時に、よく甘えるときするようにもた靠れた。そして低いほとんざや殆ど囁くような声で言った。

「それでも時々、ほんのときどきだけけれど、僕笛を吹いてみたいの。」

母親はなみだ泪ぐんだ。「そうだろうね、けれどお前の居るところではね。」

笏は、これも立膝をだいて悄然として坐っていた。

「おれが吹いてやってもいいよ、よくお前のこないときにでも、いつでもお前の居そうなところへとどくようにね。」

童子は微笑った。そういう父親を憐むような顔かおつき付をしていた。

「けれども僕のいるところへは、いくらお父さんの笛でも聞えて来はしない、僕そんな気がする。」

「いや。」

父親は、むずかしい顔をする事によつて、己れの心にある悲しそうな表情をあらわすまいと努めるように、眉をしかめた。

「お前が聞こうという気さえもつて居れば、きつと聞えるにちがいないんだ、尤もつともおまえにその気がなければ仕方がないが……。」

童子は、なかば疑うようにそしてなかば父親をなくさめるように言った。

「僕、聞こうという気はあるの。」

「それなら聞えるよ。きつときこえるに決まっているよ。」

母親も、ことばを揃えた。

「聞えますとも。」

が、その三人の影はまるで有るか無いかのように、畳と壁の上に稀薄であつた。かれらは何か幽遠なものにでも対いあうように、ひとりずつが、何を手頼たよつてよいか、そして何を信じてよいかさえ分らなかつた。かれらは唯忘れた夢をとりもどすように様々な己れの考えを考えるにすぎなかつた。

笏梧朗は、これはよく見る夢だと思い、母親は、これが次第に現実につながってゆくものだという風に、女らしい未練な考えにふけていた。

が、童子だけは自分がどこから来ているかということ、かれはかれの本体に呼吸いきづいているだけ瞭然と知っていた。

「お母様、僕はもうかえるの。」

母親は、それをいつもの慣ならいであるだけに止めることができなかつた。

「そう。もうおかえり？」

父親の顔をふと見た。笏は、煙草をふかしながら煙の中から母親のかおを見返した。

「ではお静かにしていらっしゃい。」

「ええ。」

童子は立った。間もなく表へしずかな素足の音がした。——あ
とを見送っていた父親はすぐ座を立った。「何処へいらつしやる
。」母親は、真^{まつさお}青になつた笏の顔をまともに見上げた。

「あれのあとから行つて見る……。」

笏の、そういう声音はふだんとはかすれていた。その上眼色ま
で変化っていた。女は、笏のどこかを掴もうとした。

「あれのあとから行つても何んにもなりません。」

「いや、あれのあとから行つて見る……。」

笏は、そういうと玄関のそとへ飛び出した。白い道路は遠いほ

ど先の幅が狭り、ちぢんで震えて見える。ふた側の垣根の暗が愴^{うぜん}然と覆うているかげを、童子はすたすた歩いていった。電燈は曇つてひかり沈んでいた、と、黒いかげがだんだんに遠のいてゆくのである。

三

笏梧朗は、小さい影を趁^おうてゆくうち、じめじめした水田のようなところへ出ていた。限りもない水田のうえに円い緑色の葉が浮き、そのあいまに白い花が刺繍された薄明りのさす四辺^{あたり}は、さざ波一つ漂わない、底澄んだ静かさだった。その岸へついたとき

童子は立ちどまって不意にうしろを向いた。笏は自分の姿を見られまいとしてからだを縮まらせたが、その姿はすぐ童子の瞳の中に映った。笏は、何ごとかを言おうとしたが、童子はものをも言わずに踞しゃがみ込んだが、すぐ一いちまつ抹の水煙を立てると、その水田の中へ飛び込んだ。笏はすぐ馳かけつけたが、いたずらに澄みかがやいた水田には、その波紋の拡がってゆくばかりを見るだけで、童子の姿はなかった。

笏は、此処がいったい何処であるかということを考えるより、自分がどうしてこの水田へきたかということを見ると、自分の歩いて来た道程があまりに近かったし、そしてそういう近いところろにこんなまで広い水田がある筈はずがないように思われた。笏

はうしろ向きになり歩いていくうち、いつの間にか、病院の前の町へ出ているのに驚いた。そうすると直ぐ鉄橋の下の水田へ、自分が行って居るのだということが、判然と頭にうかんで来たのだった。

笏は、わが家の前に立ち、そうしてわが家に不吉なことでもありはしなかつたかと、内部をさし覗いてみたが、かわりのない静かさが輝く電燈と一しよいっにあるきりだつた。そして妻は青い一本の草のようなもののさきに、火を烟けむらせていた。笏は、その妻の顔色が真青であるのに驚いた。

「よくお帰りなすつた。わたしどうしようかとおどおどしていたのでございます。あなたがあわてていらしつてから……。」

「水田のところまで行つたが、そこであれの姿がなくなつた。あれが私の姿をみるとすぐに飛び込んだのだ。」

女はそのとき、「睡蓮というものは晩は咲かないものでございませぬ。」

「そうさ、朝からおひるころまで咲くものだ。それがどうしたのか。」

「いえ、ただその事が気になつたものでございませぬからお尋ねしただけでございませぬ。」

女は何か考え込んでいるうち、表に足音がした。それが佇んでいるらしいけはいがした。ふたりは耳をかたむけた。眼と眼とでそれを聞き分けようとしていた。

「どなたでしょう。」

「たしかに誰かが立っているようだね。」

「たった今しがたですよ。」

「黙って？」

表でやはり人のいるけはいがつづき、そして門の戸がばたんといきなり開けられたときに、笏は新しい驚きようをして顔をすかし見た。

「私です。」

笏は、その人がれいの彫刻家であることに、すぐ気づいた。

「あなたでしたか、どうぞ。」

彫刻家は、わぎと立って、家じゆうをすかし見ながら、かすれ

た低い声でおずおず疑い深そうに言った。

「あれがもしか此方こちらへまいっていはしませんでしょうか、いましがた犬を追って出てから戻らないんで……夜分でしたがおうかがいしに上ったのです。」

「いえ。お見えになりませんの。どこへいらしたのでしょうか。」

女は、彫刻家のわびしげな眼のうちにおさまり答えたときに、
笏は、そのことに自分がかかわっているように思われてならなかった。そして、

「あれとはどなたです。」

笏は、そうたずねて見た。

「子供のことです。」

彫刻家は、わざとらしい質問をあざ笑うように、大きな手で、子供の背丈せたいをはかるようにして見せた。「つまり私はなんだかお宅へ行けばわかりそうな気がしたので、それを自分でおさえることができずに、こうして夜半でしたがお訪ねして参ったのです。」と、一歩あとへ退きながら言った。

「そのうちにおかえりでございましょうよ。」

女は、そう言うのと外へまで出て見ながら、彫刻家を見送った。

「あれがよくお宅の前……そう、ちょうどこの辺に佇っていることが多いものですからね、どういう訳なんですか、ふいにいなきつといと必然此処きつとに立っているんですよ。」

女は蒼くなつて笏をかえり見たが、こんどは胸をおさえるよう

にして、訊ねて見た。

「いつころでしようか。坊ちゃんがいらつしやるころは？」

「そう、ばんがた晩方ですな。どうも不思議な気がするんです。」

彫刻家は、そういうと「お邪魔をしました。」と言うと、すたすた暗いもと来た道路へあるき出して行つた。帽子のない、なりひくの矮い姿は、墨のようににじ滲んだ影を、くらい軒燈の下に落して行つた。

笏と女は、そのあとをぼんやり見送っていたが、笏は、そのかげのあとに、もう一つ、小さい影のあるのを見た。

「ほら、尾ついて行くぜ。小さい奴がかがんでな。」

「ええ。」

女はからだを震わせながら、それを見送った。と、れいの馬陸がくろぐろと門の台石のところへ群れ、湿りを食いあるいていた。

秋遅い荒れ冷えた風が吹き、何となくからだの一箇所に出自分の手を触れていたくなるような夕景には、童子は寒そうにちぢんだ姿をどす黒く門端に滲ませたが、どういうものか、その影は日に日に稀薄になった。

古い写真絵のような、雨漏りのした紙のようにきいろくぼんやりしていた。

女は、それがどういう訳で、うすく、にじんで見えるのか分ら

なかった。ただ、童子の手をとるごとに、自分の目をこすりながら、笏梧朗に言った。

「わたくし眼が悪いんでしょうか。この子がぼんやりとしか見えません。それもこの頃になってはげしくなるばかりですの。」

「お前ばかりではない、おれも何んだかこの子の姿がぼやけて見えるのだ。まるで影みたいに遠くなって見えるのだ。」

笏梧朗は、ふしぎに日に日に輪廓のぼやけた童子を見るごとに、童子が自分らのそばから日に日に遠のいてゆく前徴だということや、もともと影のような童子のことゆえ、影はやはり影としか眼にうつらなくなるのだと、悲しげに心でうなずいた。

「この子が亡くなってから、どれだけ経っただろうか。」

「三月になります。」

女は、そう答えると、曲げた指をもとのまま、膝の上に置いた。笏梧朗は、童子の眼をみつめた。童子も、しばしば眼をしばたいたいては、何んだか絶えず不透明なものを仰ぎ見るような眼付をしていた。そして、

「お父さん、僕もやはり何んだかあなた方がよくわからないの。見ようとするほど、眼がかすんでしまつて能く見えないんです。どうしたんでしよう。」

笏もその妻も目を合せた。三人が三人とも何か羅うすもののようなもので眼隠しされたような気がした。

「お父さんの顔が見えるかね。そこからお前の目に。」

「え、ぼんやりと……。」

童子は目をしばたいた。母親も心に苛立ちを見せながら目をこすったりした。

「こうしてお前とわし等とは、日が経つごとに縁が切れてしまうのだ。お互いの影がだんだんに薄くなってしまつて、お前にもわし等にもお互いに見ることができなくなるのだ。」

父親は、そういうと童子の手を握りしめた。童子は、その手を父親のするとおりに委せていた。

「でも、そのうちに又見えるようになりはしないでしょうか。」

母親は童子の顔近く眼をよせながら、こら「こら 忪えられなさそうに言つた。」

「いや、もう再またと子供を見ることはできないだろう、何となくそう思われる。いつまでも子供をみていることはできなくなるだろう。」

母親は、童子に縋すがつて泣いたが、童子は、間もなく門の方へ駆け出した。そして全くそのかげを消してしまった。

その翌晩から、笏はその妻と食卓に對いながら、ぼんやり門前をながめていたが、いつもの時間になっても童子の歩いてくる姿はなかつた。垣を覆うつたの葉が、長い茎を露しおわして凋しおれ落ちる微かな夕風が渡るだけだった。

かれらの退屈で陰気な日が続いても、童子の寂しい姿すら見ることができなかつた。笏もその妻も、灯に對つて悄然と坐つたき

りだった。長い夜は壁ぎわから冷えわたるだけで、何一つかれらの心には温かいものがなかった。

「あれはみな夢をみていたのでしょうか。あの子の訪ねて来たことも、そうして話していたことも。」

母親は、やつれた面をあげ、夫をみあげたが、笏は、やはりちからなく坐つてしばらく黙っていたが、やつと鬱々うつうつしい口をひらいて言った。

「あれらの出来ごとはおれとお前とが、想像つくりあげていたようなもので、それが今はあとかたもなくコワされたのだ、そう思うより仕方がない。」

笏はその心に、童子の来たことも偶然に父と母との考えがいつ

の間にか毎日の出来事のように仕込まれていたに過ぎない。それもお互いが子供のことを考え合っているとき、微妙な働きがあれほどまでに正確に動いていたかと思うと、すこし恐ろしい気もした。——笏梧朗はなにか考え込んでいたがふと愀々ゆうゆうした目をあげた。

「こうしていてもあれがやはり来ているのかも知れない、ただ、目に見えないだけかも知れないのだ。」

「そうね、わたしもそんな気がしますの。」

女もそう答えると、あたりをうつすりで見廻した。わけでも庭の方へその視線がただようて行った。

「あれが来ていると考えるより仕方がない。」笏は、そう言って

あたりを眺めても、何も影らしいものすらなかった。——二人は、青色を合んだ夜空の下へ出て、置石のそばへかがんだ。妻は、石燈籠の燈石のあるそばで、マツチ燐寸をす擦った。そして苔の生えた青い燈籠に灯を入れた。

「久しい間灯を入れなかつたな。」

笏は、くらい繁りの間にその燈籠の灯のちらつくの眺めた。

が、しばらくすると、女はひっそりした声で笏を呼んだ。

「たいへんな虫。」女は、その湿りある地面を指さした。そこ
にれのくろぐろした馬陸が、小さい足跡を縫うように這い動い
ていた。

「あれはやはり来ているのね。」

女の、その声は嬉しそうに輝いていたが、どこか凄気せいきのある青くさい声音であった。

「来ているらしい。」

笏は、女と同様に広い庭さきに目をさまよわせたが、蒼茫そうぼうとした月つき明あかりを思わせるようにあかるい夜ぞらと庭樹の間にはそれらしい陰影かげすらなかった。が、又何となくふしぎに目のとどくところに茫乎ぼううとした影が、ちぢまり震えて見えるような気もした。繁りの奥や、幹が地に立つところに、かれらはその愛児の姿の、ほとんど水に濡れたようになっていたのを眺めた。

「あれの方でも探しているかも知れないのだ。だが何となく盲同士のような気もするのだ。」

笏は、あたりを眺めながら、縁端へ来て何時までも佇つて影を求めている、やせ細つている己が妻を哀れに思った。

「わたくし、こうして手をさしのべていますと、掌が温かいような気がいたしますの。あたまがちようど恰度ふれてくるように。」

女は、右の手のひらを伸ばして、何かに触れてでもいるように、宙に浮しながら目を凝らしていた。——笏には、その手の下に、誰かが背延びをしながら、なおそれにとどかないでいる姿を描くには、何のさまたげもなかった。

「だが、そんなことを為するものではない、気味の悪い。」

「え、」

女は、手を引込めた。

女は、夫のいる縁側へ来た。ふたりとも、ぼんやりと庭をながめていた。疲れているというほどでもないが、ぼんやりと凡ては夢のうちにある気がしていた。一秒間がふしぎに十年も二十年も経つような退屈な時間が、ゆるく廻っているようでもあった。わけても笏には、途方もない大きな車の輪が、のろくゆるく廻っていて、その轍わだちの間に、誰かが挟まっているような気がした。それは、童子でもありません。笏は目を凝らしてながめていた。

女は、立ってれいの光る小さい堂宇どううの前へ行つた。そして細い一本の草のような烟るものに火を点つけた。かれらは、かれらの生んだものを慕うそれにふさわしい、小さいお鉦鼓かねを叩いた。

笏は、玄関へ出た。そして植込みをながめ、表へ出た。そして往来の遠くまで眺めわたしたが、何の姿もあろう筈がなかった。晩のことで、豆ずれをさせながら、すたすたと犬が濡れたように走って行つた。それを見ていると、影がちぢまり小路へまがると、それきり何も無い夜目にも一色の白い道路であつた。

「お父さん——。」

笏は、声のある方へ振り向いた。背後にその声があつた。そうかと思うと前にも、そして空にも、また地ごもるようなところにもあつた。どこを向いても、声は、かれにむすびついた。

すたすたと誰かが歩いて行つたが、よく見ると、さきの犬がもとの道を小路から出てきた。どす黒い影だつた。笏は、その犬を

呼んでみたが、ふりかえりもしないで、やはり寂しい豆ずれを曳いて行つた。かれは、間もなく部屋へかえると、れいの、織い笛をとり出した。そしてそれを静かに吹きならして見た。その笛の音について何かが惹かれてくるような気がしたからである。

雨になつて笏の家の内も外も、ひっそりとしていた。かれは内側から雨戸を閉め、そして寸分の隙のないようにして置いたらしく少しの明りさえ漏れていかなかった。しずかな雨がつついて話しかきこえなかつた。が、ふしぎに雨戸のきわに小さい影がいつころとなく——多分、雨戸を閉めてからあとに、どす黒く滲んでいて、すこしも動かなかつた。それは鳴らない丹塗りの笛をさげた、れいの童子の姿であつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第1巻」新潮社

1965（昭和40）年11月15日

初出：「女性」

1923（大正12）年2月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年10月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

後の日の童子

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>